

東大阪市出土の漢式系土器について

阿 部 嗣 治

I はじめに

昭和50年に当調査会が発掘調査を実施した芝ヶ丘遺跡において、古墳時代の包含層および井戸、弥生後期の溝内より、格子叩き、縄蓆文を有する土師質の土器が11点出土した。器形の判別できるものは少なく、井戸内より甕、溝内より甕底部の2点で、他はすべて破片である。

従来、東大阪地域の遺跡より出土した格子叩き、平行叩き、縄蓆文を施した土器は、現在のところ芝ヶ丘遺跡、縄手遺跡、西代遺跡、池島遺跡、日下遺跡で検出している。この3種類の叩き目を有する土師質の土器は、漢式土器あるいは金海式土器の影響を受けて成立したと考えられている漢式系土器^①と呼ばれる土器群の範疇にはいるものである。

漢式系土器の研究は、古くは中山平次郎氏が、弥生土器の中に須恵器と同一の叩き目を持つ土器に注目し、「弥生式祝部式土器」と呼んで紹介している^②。畿内では藤沢一夫氏が、豊中市上津島遺跡より出土した縄蓆文を持つ須恵質の土器と、格子叩きを持つ土師質の土器を取り上げ、「漢韓系式土器」と名付けて、中国、朝鮮の土器の影響を受けた土器であることを指摘している^③。

その後、堅田直氏は、昭和35年、39年に東大阪市日下遺跡の発掘調査を実施し、縄文土器、土師器、須恵器と混在した状態で検出した10数点の漢式系土器を報告している。この報告では、漢式系土器を、漢代の系統を引く土器で、朝鮮半島からの渡来者、あるいは帰化人のもたらし^④た土器であると規定し、その時期を5世紀中葉であると考えている。この報告以後は、しばしば報告例はあるが、基礎的作業、およびその実態、意義などの研究はなされていないのが現状である。

本稿は、まず、基礎作業として、東大阪地域の遺跡より出土した漢式系土器を中心に、畿内諸地域より出土したものを集成し、漢式系土器研究の基礎資料にしたい。次いで、器形、成形、調整技法、胎土、時期などを分析して実態を明らかにしつつ、漢式系土器の持つ意義を探って行きたい。なお、この稿では、漢式系土器を、格子叩き、平行叩き、縄蓆文を持ち、朝鮮半島からの搬入品ではなく、在地の粘土で製作した土師質の土器と規定したい。なぜならば、漢式系土器の特徴である3種類の叩き技法が、中国の漢代に一般的に使用された技法であり、それが朝鮮半島に移入され、金海式土器を成立させ、次いで日本に伝来した技法であり、この技法を朝鮮半島からの渡来者、あるいは在地の人々が使用した可能性が強いと考えるからである。

Ⅱ 東大阪市域出土の漢式系土器

東大阪市域の遺跡からの漢式系土器の出土は、現在、5遺跡、20数点である。破片が多く、器形の判別できるものは少ない。以下、遺跡ごとに記述する。

芝ヶ丘遺跡（第2図、第3図）

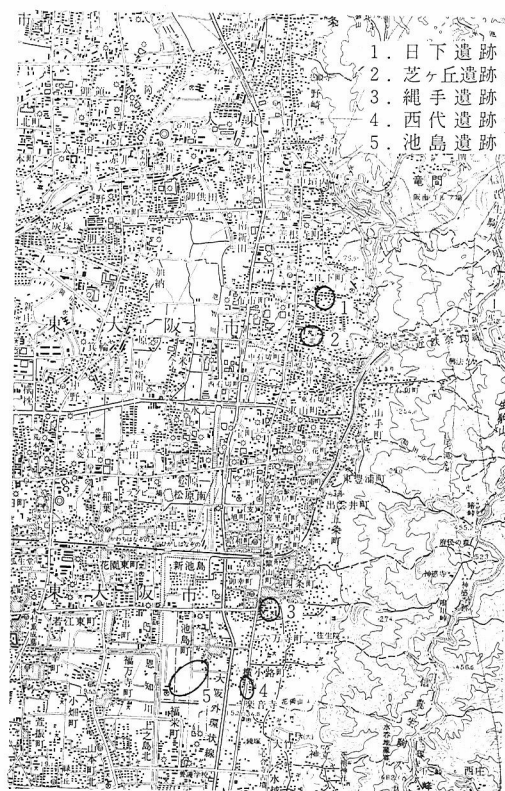
芝ヶ丘遺跡は、石切町芝の北端から日下町南部にかけて広がる縄文時代後期から古墳時代にかけての複合遺跡である。位置は、辻子谷によって形成された扇状地の末端にあり、標高約20mである。

漢式系土器は、昭和50年の発掘調査で出土した。古墳時代の素掘りの井戸内より7点、古墳時代の包含層より3点、弥生時代後期の溝内より1点の計11点である。

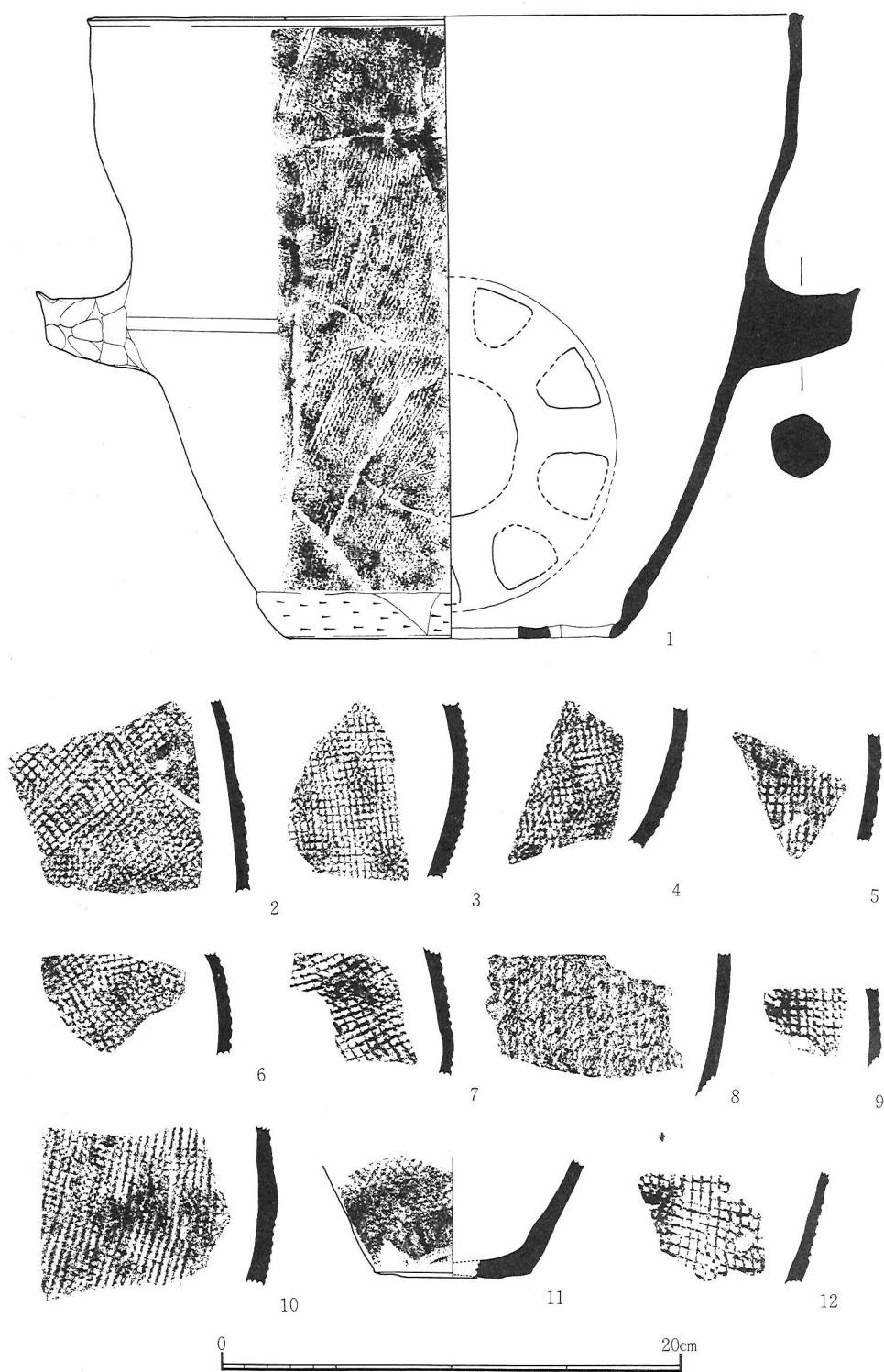
甗(1)は、口径31.3cm、器高27cmで、平底の底部から口縁部にかけてほぼ直線的に少し開き気味にのび、口縁部近くで少し内弯して終る。口縁端部は、少し外上方へつまみ出し、凹面を作っている。把手は、断面がほぼ円形で、器高の中位に位置し、内側より外側へ挿し込んで取り付けている。蒸気孔は、中央に円形の孔を内側から穿ち、その周囲に9ヶ所の台形の孔を外側から穿っている。胴部外面は、縄蓆文を施し、ヘラによる浅い沈線を1本入れている。内面は、非常に丁寧なナデ調整である。胎土は、1～2mm程度の石英、雲母粒を多く含み、灰褐色を呈

している。井戸内の他の土器は、いずれも破片で器形は不明である。すべて外面は、格子叩きを施し、内面は、丁寧なナデを行なっている。胎土は、どの土器も長石、雲母などの砂粒を多く含むが、(2)は角閃石を含んでおり河内産の可能性が強い。井戸内の共伴の土器は、須恵器の杯身・甕と、土師器の高杯、小型丸底壺などである。特に須恵器は、杯身・甕ともTK-73型式の特徴をよく備えている。

包含層内出土の土器は破片のみである。(3)は、外面に格子叩きを施し、内面は丁寧なナデ調整である。胎土は、角閃石、長石、雲母粒を含んでおり、河内産であろう。(4)は、比較的大きな縄蓆文が施されており、内面は、ナデを行なっている。胎土は荒く、長石・石英・雲母粒を多く含んでいる。(6)は、外面に格子叩きを施し、内面は、他の土器同様、丁寧なナデ調整である。胎土は、細かい長石・雲母粒を中心に多く含んでいる。



第1図 遺跡位置図 (1:100,000)



第2図 漢式系土器実測図（芝ヶ丘遺跡）

弥生時代後期の溝内出土の土器は、甕底部で、径6.8cm。外面は、格子叩きを施した後、ナデを行なっている。内面は、丁寧なナデ調整である。胎土は、角閃石・長石・雲母粒を含んでおり、河内産であろう。

他に芝ヶ丘遺跡の漢式系土器は、採集品であるが2点出土している。1点は甕で、口径21cm、器高36.5cm。たまご形の胴部に、ゆるく「く」の字状に外反する口縁部を持ち、端部は丸くおさめる。胴部外面は、全体的に格子叩きを施した後、部分的にナデている。内面は、非常に丁寧なナデ調整を行なっており、胴部下半に当て板の痕跡を少し残している。胎土は、長石・石英などの粗砂粒を多く含み、黄褐色を呈している。もう1点は破片で、外面は、彫りの深い格子叩きを施し、内面は、丁寧なナデである。胎土は、長石などの粗砂粒を含み、乳白色である。

縄手遺跡（第4図2・3・4・5）

南四条町、六万寺町に所在する縄文時代から古墳時代にかけての複合遺跡である。生駒山地の西麓に発達する複合扇状地の1つ、鳴川谷によって形成された谷口扇状地の末端に位置する。(3)は、昭和55年の調査で、古墳時代の包含層より出土したものである。外面に格子叩きを施し、内面は、丁寧にナデている。胎土に、角閃石・長石粒を含み、黄褐色を呈する。(2)、(4)、(5)は、いずれも採集品である。(2)は、外反する口縁部を持つ甕である。口縁端部は面を有し、内面は少し凹んでいる。胴部外面は、長辺3～5mm、短辺2～3mmの斜格子叩きを施し、頸部にあらひハケメを行なっている。内面は、口縁部から頸部にヨコナデ、胴部はナデ調整である。胎土に長石・石英・雲母粒を多く含み、黄赤褐色を呈している。(4)は、外面に格子叩き、内面にナデを施している。(5)は、外面に平行叩きを施した後、ヘラ描沈線を入れ、内面は、丁寧なナデである。胎土は、(4)、(5)ともに角閃石・長石・雲母片を含んでいる。

西代遺跡（第4図6）

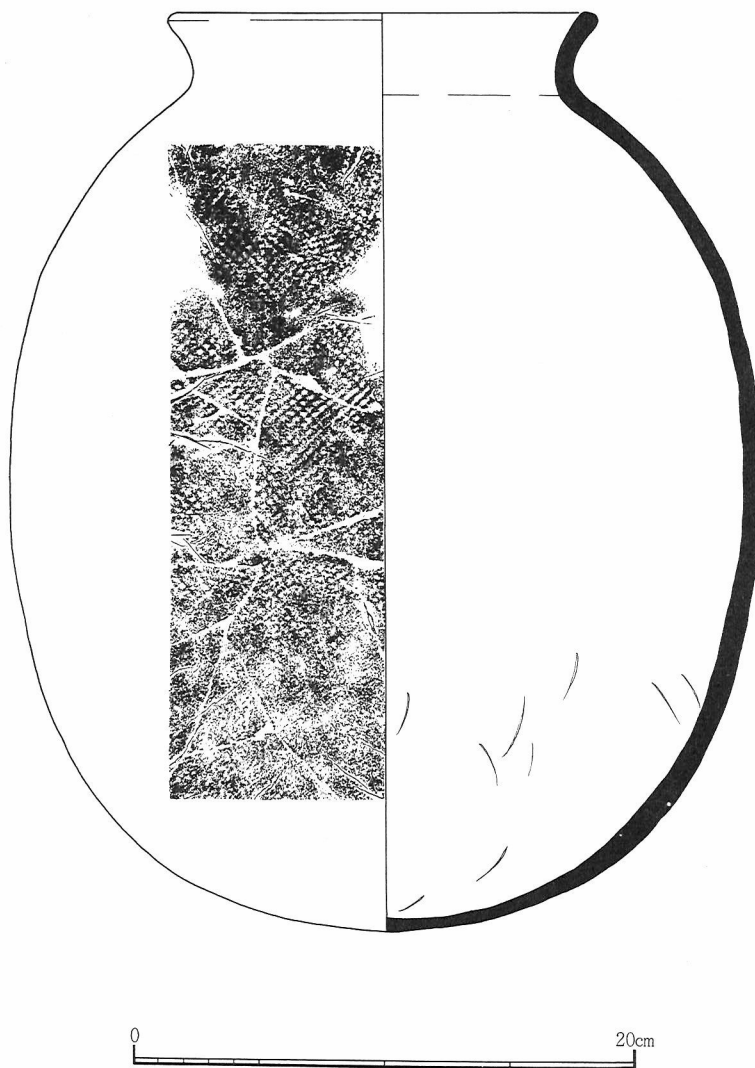
横小路町に所在する。過去に古墳時代の遺物が出土しているが、未調査の為詳細は不明。土器は、破片で、外面に格子叩きを行なった後、部分的にナデを施している。内面は、ナデ調整である。胎土に長石・雲母粒を多く含み、赤茶褐色を呈している。

池島遺跡（第4図7・8・9・10）

池島町に所在する。従来、池島条里遺構として著名である。昭和55年の調査により、弥生時代、古墳時代の包含層、遺構が検出された。古墳時代の包含層は、5世紀代の遺物が中心である。(7)、(8)は、古墳時代の包含層内より出土した。(7)は、外面に非常に細かい格子叩きを持ち、内面は、ナデ調整である。(8)は、浅い格子叩きを持ち、内面は、丁寧なナデを施している。胎土は、どちらも角閃石・雲母粒を多く含んでおり、暗褐色を呈している。(9)は、古墳時代の土坑内より出土した。外面は、浅い格子叩きを施した後、ナデている。内面は、丁寧なナデ調整である。胎土に角閃石・長石・雲母粒を多く含み、暗褐色である。

日下遺跡（第4図1）

日下町に所在する縄文時代、古墳時代の遺跡である。日下川北岸に形成された台地上に立地しており、標高約20mである。過去、幾度となく発掘調査が実施され、漢式系土器が多く出土



第3図 漢式系土器実測図（芝ヶ丘遺跡）

している。(1)は、昭和55年の調査により出土したものである。器形は甗で、口径25.6cm、器高23.3cmである。平底の底部から少し内弯気味に開きながら口縁部に至る。口縁部は外反しており、端部は浅い凹面を作っている。把手は、器高の中位に位置し、内側より挿し込んで取り付けている。把手上面よりヘラ状工具で浅い切り込みを入れており、先端部下方に深さ約5mmの円孔を穿っている。底部の蒸気孔は、中央に円形の孔を穿ち、その周囲に台形の孔を7個穿っている。いずれの孔も外側より穿っている。胴部外面は、長辺12mm、短辺2mmの長方形の格子叩きを施した後、ヘラによる浅い沈線を3本入れている。内面は、全体にあらいなデ調整を行っている。胎土は、長石・雲母の細砂粒を多く含んでおり、赤味がかった黄褐色を呈している。

以上、東大阪市域の遺跡出土の漢式系土器を見て来た。叩きの種類で最も多いのは格子叩きである。単位は、^⑤2～3mmのものが大部分を占めている。ただ、日下遺跡出土の甑の格子叩きが、長方形を呈しているが、方形という点では一致しているので格子叩きの1種として考えた。縄蓆文を持つ土器は、2点である。どちらも板に縄を巻きつけて原体とし、器表を叩いている。平行叩きを持つ土器は1点である。平行叩きを施した後、沈線をめぐらす手法は、漢式土器、金海式土器において通例の手法である。

これらの漢式系土器の胎土は、長石・雲母粒をどの土器も含んでいる。河内産の土器を判別する1つの指標である角閃石を含んでいる土器は8点である。

Ⅲ 畿内および周辺諸地域出土の漢式系土器

東大阪市域以外での漢式系土器の出土例は、現在のところ16遺跡である。ここでは、器形の明確なもののみ記述する。

枚方市茄子作遺跡

5世紀代の住居址より1点出土している。器形は甕で、口径15cm、器高18cm。ほぼ球形の胴部に、「く」の字状に外反する口縁部を持つ。胴部外面は、全面に格子叩きを施し、内面は、ナデ調整である。^⑥

四条畷市中野遺跡

5世紀後葉の溝内より、甕2点、甑1点出土している。甕は、どちらも平底で、胴部は少し内湾しながらほぼ直立して口縁部に至る。口縁部はつまみ出すように外反して終る。胴部外面は、縄蓆文を施し、内面は、指頭痕を残すが、あらいナデである。甑は、平底の底部から、ほぼ直線的に立ち上がり、そのまま口縁端部に至る。把手は、器高の中央に位置し、上面より切り込みを入れている。胴部外面は、格子叩きを全面に施し、部分的にナデている。内面は、あらいナデ調整を行なっている。^⑦

大阪市茨田安田遺跡

5世紀代の落ち込み内より甕が出土している。球形の胴部に、短かく外反する口縁部を有する。胴部外面は、格子叩きを施し、内面は、丁寧なナデ調整を行なっている。^⑧

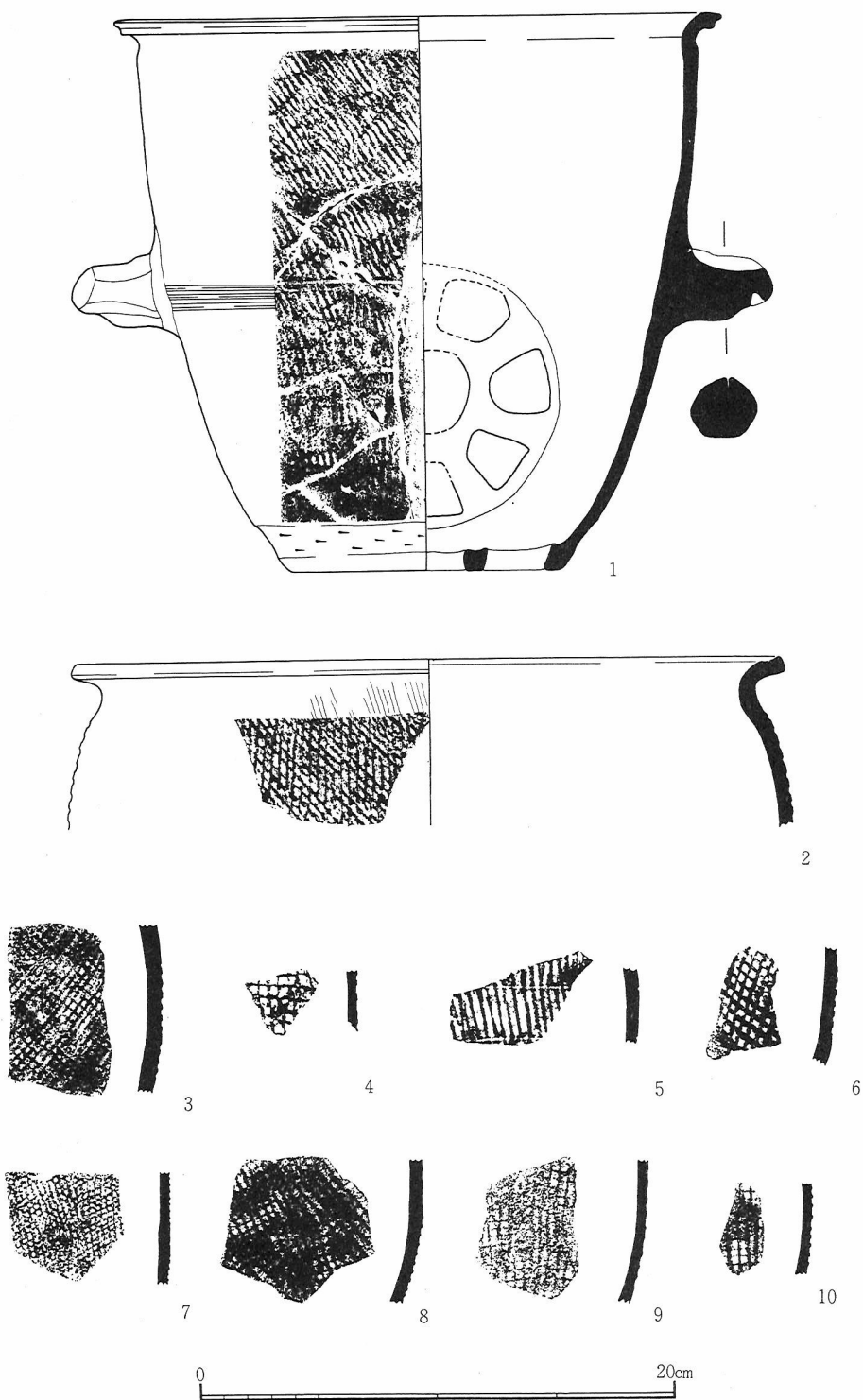
柏原市船橋遺跡

古墳時代の包含層より出土。外反する口縁部を持ち、口縁端部は下方に拡張し、明瞭に稜をつくっている甕である。肩部外面は、格子叩きを施し、内面は、丁寧にナデを行なっている。^⑨

藤井寺市土師の里遺跡

5世紀代の溝内から、甕1点、破片4点を検出している。甕は、口縁部が短かく外反し、胴部は、ふくらみを持たず直線的に内下方へのびている。一見鉢形を呈している。胴部外面に格子叩きを施し、内面は、ヘラ削りである。口縁部直下は、ハケメ調整である。他の破片は、いずれも外面に格子叩き、内面に丁寧なナデをそれぞれ施している。^⑩

茨木市郡遺跡



第4図 漢式系土器実測図 (1 日下遺跡、2～5 縄手遺跡、6 西代遺跡、7～10 池島遺跡)

漢式系土器出土集成表

番号	遺跡名	所在地	層位・遺構	器形	叩きの種類	単位%	時期
1	芝ヶ丘	東大阪市中石切町	井戸内	—	格子	3	5C中葉～後葉
2	芝ヶ丘	東大阪市中石切町	井戸内	—	格子	2～3	5C中葉～後葉
3	芝ヶ丘	東大阪市中石切町	井戸内	—	格子	2	5C中葉～後葉
4	芝ヶ丘	東大阪市中石切町	井戸内	—	格子	3	5C中葉～後葉
5	芝ヶ丘	東大阪市中石切町	井戸内	—	格子	2	5C中葉～後葉
6	芝ヶ丘	東大阪市中石切町	井戸内	—	格子	2	5C中葉～後葉
7	芝ヶ丘	東大阪市中石切町	井戸内	甔	縄 蓆	—	5C中葉～後葉
8	芝ヶ丘	東大阪市中石切町	茶褐色土	—	格子	2～3	5C～6C
9	芝ヶ丘	東大阪市中石切町	茶褐色土	—	格子	2～3	5C～6C
10	芝ヶ丘	東大阪市中石切町	茶褐色土	—	縄 蓆	—	5C～6C
11	芝ヶ丘	東大阪市中石切町	溝内	甔	格子	2	弥生時代後期
12	芝ヶ丘	東大阪市中石切町	表面採集	甔	格子	2	—
13	芝ヶ丘	東大阪市中石切町	表面採集	—	格子	3	—
14	縄 手	東大阪市南四条町・六万寺町	暗茶灰色土	—	格子	2～3	5C後葉～6C前葉
15	縄 手	東大阪市南四条町・六万寺町	表面採集	甔	斜格子	3～5	—
16	縄 手	東大阪市南四条町・六万寺町	表面採集	—	平行	—	—
17	縄 手	東大阪市南四条町・六万寺町	表面採集	—	格子	3	—
18	西 代	東大阪市横小路町	表面採集	—	格子	2	—
19	池 島	東大阪市池島町	青灰色粘土	—	格子	2	5C
20	池 島	東大阪市池島町	青灰色粘土	—	格子	3	5C
21	池 島	東大阪市池島町	青灰色粘土	—	格子	3	5C
22	日 下	東大阪日日下町	暗茶褐色砂質土	甔	格子	長短 12/2	5C～6C
23	日 下	東大阪日日下町	黒色有機土層	—	平行	格子 2～3	5C中葉
24	茄子作	枚方市茄子作	住居址	甔	格子	2～3	5C
25	中 野	四条畷市中野681	溝内	甔	縄 蓆	—	5C後葉
26	中 野	四条畷市中野681	溝内	甔	縄 蓆	—	5C後葉
27	中 野	四条畷市中野681	溝内	甔	格子	3	5C後葉
28	茨田安田	大阪市鶴見区茨田安田町	落ち込み内	甔	格子	4	5C
29	長 原	大阪市平野区長原	—	—	格子	3	—
30	船 橋	柏原市船橋大和川床	暗褐色粘土	甔	格子	3	5C
31	土師の里	藤井寺市土師の里	溝内	甔	格子	3	5C
32	土師の里	藤井寺市土師の里	溝内	—	格子	4	5C
33	土師の里	藤井寺市土師の里	溝内	—	格子	3	5C
34	土師の里	藤井寺市土師の里	溝内	—	格子	3	5C
35	土師の里	藤井寺市土師の里	溝内	—	格子	3	5C
36	郡家川西	高槻市川西町・郡家本町	—	甔	縄 蓆	—	—
37	郡	茨木市郡上穂積・畑田町	茶褐色粘質土	甔	平行	—	5C中葉～6C
38	上 津 島	豊中市上津島	表面採集	—	格子	3	—
39	豊中古池	泉大津市豊中	旧河川状遺構内	甔	格子	4～5	5C
40	七ノ坪	泉大津市豊中	溝内	甔	格子	2	4C～5C
41	小 山	姫路市延末小山	Ⅳ地点	—	格子	2～3	弥生時代後期
42	小 山	姫路市延末小山	Ⅳ地点	—	格子	2～3	弥生時代後期
43	小 山	姫路市延末小山	Ⅳ地点	—	格子	2～3	弥生時代後期
44	小 山	姫路市延末小山	表面採集	—	格子	2～3	—
45	岸	加古川市西神吉町岸	—	—	格子	2～3	—
46	鳴 神	和歌山市鳴神	溝内	甔	格子	3～4	5C中葉～後葉
47	鳴 神	和歌山市鳴神	溝内	—	縄 蓆	—	5C中葉～後葉
48	南 市 東	滋賀県安曇川町	住居址内	甔	格子	4～5	5C中葉～後葉
49	南 市 東	滋賀県安曇川町	住居址内	甔	格子	4～5	5C中葉～後葉
50	南 市 東	滋賀県安曇川町	溝内	—	格子	2	5C中葉～後葉
51	南 市 東	滋賀県安曇川町	溝内	—	縄 蓆	—	5C中葉～後葉

古墳時代の包含層より甕が出土している。短かく外反する口縁部に、胴部は、内側に内弯しながら平底の底部に至る。全体的に偏平な器体をしている。外面は、平行叩きを胴部全面に施し、内面は、当板の痕跡が明瞭に残っている。^⑪

泉大津市古池遺跡

旧河川状遺構内より出土している。報告者が模倣土器と呼んでいる2重口縁の甕である。胴部は球形で、丸底と思われる。胴部外面は、格子叩きを施し、その上をすり消し状にナデ調整を行なっている。内面は、全面ナデ調整である。^⑫

泉大津市七ノ坪遺跡

古墳時代の溝内より甕が出土している。平底の底部より少し開き気味に口縁部へのびていき、口縁部近くで少し外反して終る。底部の蒸気孔は、中央に1個、その周囲に8個、いずれも円形の孔を穿っている。把手は、胴部中央に位置し、上面より三角形の切り込みを入れている。胴部外面は、格子叩きを施し、内面は、ヘラ削りの後、ナデで仕あげている。^⑬

和歌山市鳴神遺跡

5世紀中葉から後葉にかけての溝内より甕1点、破片1点が出土している。甕は、たまご形の胴部と、外反する口縁部を持ち、頸部に段を有する。口縁端部は、やや水平につまみ出している。胴部外面に格子叩きを施し、内面は、ヘラ削りを行なっている。^⑭

滋賀県安曇川町南市東遺跡

古墳時代の2軒の堅穴住居址内より、それぞれ1点ずつ甕が出土している。どちらの甕も器形はほぼ同じである。平底の底部より、少し開き気味に内弯しながらそのまま口縁部に至る。把手は、ほぼ中央に位置し、三角形の切り込みを入れている。底部の蒸気孔は、中央に1個、その周囲に8個円形の孔を穿っている。胴部外面は、比較的大きい格子叩きを施し、内面は丁寧にナデ調整を行なっている。^⑮

上記の遺跡の他に、畿内で漢式系土器が出土している遺跡は、大阪市長原遺跡^⑯・高槻市郡家川西遺跡^⑰・豊中市上津島遺跡^⑱・姫路市小山遺跡^⑲・加古川市岸遺跡^⑳がある。いずれも、破片のみで器形は不明である。

Ⅳ まとめ

以上のように、東大阪市域を中心に、畿内諸地域出土の漢式系土器を見て来た。これらをまとめると、まず器形は、甕と甗の2種類である。甕は、2類あり、1類は、従来から存在する土師器に通例の「く」の字状に外反する口縁部と、球形あるいはたまご形の胴部に底部が丸底のものである。2類は、弥生土器から土師器の形式変化に当てはまらないタイプである。短かく外反する口縁部から、直線的、あるいは少し内弯しながら平底の底部に至るタイプである。中野遺跡、土師の里遺跡出土の土器が好例である。

甗は、口縁部の形態で2類に分けることができる。1類は、胴部からそのまま口縁端部に至るものである。このタイプが主流である。2類は、口縁部が外反するものである。

次に、漢式系土器の大きな特徴である胴部外面の叩きは、格子叩きが圧倒的に多い。ついで、縄蓆文、平行叩きの順である。これは、漢式土器、金海式土器も同様である。胴部内面の調整は、ほとんどがナデ調整である。例外として、土師の里遺跡、鳴神遺跡出土例のヘラ削りがある。このナデ調整は、芝ヶ丘遺跡の甕のように、叩きを施す際の当板をナデ消す為のものと思われる。次に、漢式系土器の時期であるが、初源は、弥生後期に求められるが、大部分が5世紀代の所産である。

このように、漢式系土器は、器形、技法、時期とも須恵器との関連が深い。初期須恵器において、格子叩き、縄蓆文、平行叩きの後沈線^{②①}を施すのは通例である。時期的にも初期須恵器は、5世紀中葉である。さらに、漢式系土器が出土している遺跡において、初期須恵器、あるいは、舶載の陶質土器が共伴している例が多い。芝ヶ丘遺跡・池島遺跡・茄子作遺跡・中野遺跡・古池遺跡・鳴神遺跡・南市東遺跡などで確認している。従って、日本に須恵器が伝来した段階で、漢式系土器も製作されたと考えられ、その製作集団は、渡来集団と非常に密接な関係にあると言えよう。

最後に、本稿をまとめるにあたって、宇治田和生、野島稔、奥井哲秀、深沢芳樹、坪之内徹、中江彰諸氏に、資料提供、助言をいただいた。記して謝意を表したい。

注

- ① 堅田直 「枚岡市地下遺跡出土の漢式系土器について」『大阪信愛女子学院短期大学紀要』
- ② 中山平次郎 「祝部式の厭痕を示せる弥生式土器」『考古学』5-7 1934。
- ③ 藤沢一夫 「上津島弥生式遺跡出土の漢韓系式土器」『豊中市史 史料編Ⅰ』豊中市 1960。
- ④ 前載①
- ⑤ 格子叩きの単位の大きさは、凹面のみの大きさを計っている。
- ⑥ 枚方市文化財研究調査会宇治田和生氏の御教示による。資料を実見させていただいた。
- ⑦ 四条畷市教育委員会野島稔氏の御教示による。資料を実見させていただいた。
- ⑧ 『茨田安田遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1975。
- ⑨ 田辺昭三、佐原真、原口正三 『船橋』平安学園考古学クラブ 1958。
- ⑩ 深沢芳樹氏、坪之内徹氏の御教示による。資料を実見させていただいた。
- ⑪ 『茨木市郡遺跡発掘調査概報』茨木市教育委員会 1978。
- ⑫ 『豊中・古池遺跡発掘調査概報そのⅢ』豊中・古池遺跡調査会 1976。
- ⑬ 『七ノ坪遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1974。
- ⑭ 『鳴神地区遺跡発掘調査概報Ⅰ・Ⅱ』和歌山県教育委員会 1979。
- ⑮ 『南市東遺跡発掘調査概報』安曇川町教育委員会 1979。
- ⑯ 『盾列』第6号 奈良大学考古学研究会 1980。
- ⑰ 原口正三 『原始古代の高槻』『高槻市史 本編Ⅰ』高槻市 1977。
- ⑱ 前載③
- ⑲ 今里幾次 「播磨弥生式土器の動態」『考古学研究』15-4 1969。
- ⑳ 前載⑱
- ㉑ 田辺昭三 「須恵器の誕生」『日本美術工芸』第390号 日本美術工芸社 1971。